

## 2022年度 大学入学共通テスト 国語 古典(本試験) 分析

試験時間 80 分

難易度	出題分量	出題傾向
全体としては昨年並み。第3問(古文)はやや難化した。第4問(漢文)はやや易化した。	第3問、第4問で文章がやや長くなった。設問数は第3問1減、第4問1増。解答数は変化なし。	第3問の二つの文章を関連付けて違いを答える問題が新傾向。第4問は昨年に引き続き漢詩と散文の出題であった。
<p><b>総評</b></p> <p>共通テスト2年目にして、旧センター試験と異なる独自性が顕著になった。第3問の古文では、会話文を通して同一テーマの異なる文章を比較することが求められた。文章Ⅰがやや読みにくい、文章Ⅱと照らし合わせながら理解することができ、そうした読み方の工夫も必要である。こうした新傾向にとまどった受験生も多かったのではないか。その意味で古文は昨年度と比較してやや難化したと言える。一方、漢文は基本的な語や句法、漢詩の知識があれば解ける問題が多く、受験生は比較的取り組みやすかったのではないか。</p>		

### 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	設問別分析
第3問	古文	50点	<p>問1は通常の傍線部解釈の問題である。基本的な古語や文法に関する知識が問われている。</p> <p>問2は傍線部の語句や表現に関する説明問題である。基本的な文法知識や語句の意味、人物の心情など、古文の読解の基礎力が1問の中で試される。</p> <p>問3は通常の傍線部説明問題である。前後の文脈から院の心情を推測すればよい。</p> <p>問4は教師と生徒3人の話し合いを通して、文章Ⅰの歴史物語と文章Ⅱの日記の違いを考える問題である。教師と生徒の会話は試行テストで見られた形式だが、昨年の共通テスト1年目では出題されなかったため、新傾向の問題だと言える。また、高度な読解が求められる箇所もある。そのため、受験生はてこずったのではないだろうか。</p>

第4問	漢文	50点	<p>問1は例年通りの語の意味を問う問題である。基本的な知識で解答できる。問2は返り点と書き下し文の組み合わせを答える問題である。これも旧センター試験から引き続いて出題されている。問3と問5はいずれも基本的な句法の知識があれば正解できる。問4は漢詩の基本知識があれば正解できる。このように、問1～5までは、漢文の基本知識が身につけていけばそれほど苦労しない問題が多い。ここできちんと得点できるかどうかで大きく差がつくだろう。</p> <p>問6と問7は詩と序文を関連付ける問題という意味では共通テストらしさを感じさせる。詩がやや難解であるが、序文との関連で理解できるかどうかポイントとなる。</p> <p>以上の通り、漢文は基本的な知識があれば高得点が期待できる問題だったと言える。</p>
-----	----	-----	---

#### 次年度以降の受験生へのワンポイントアドバイス

第3問のような複数の文章を関連付ける問題は、普通の問題集を解いているだけでは対応できない。こういう力をつけるための教材として最も優れているのが学校の教科書である。学校の授業では文章の全体構造の把握を取り上げるだろう。また、発展的内容として教科書で複数の文章の比較が取り上げられているはずである。そういう意味で学校での学習を重視すべきである。

一方で、知識事項の習得も欠かせない。古語、古典文法、漢文の句法などの知識は共通テスト対策として必須である。まめに辞書を引いたり、文法や句法を覚えたりすることを継続することが必要だ。特に漢文は基本的知識が身につけていけば得点できる問題が多く出題される傾向が見えてきた。面倒だと思わず早めによりしっかりと対策しておくべきである。